

『原爆文学研究』投稿規定

一、原爆文学研究会の機関誌として会員からの意欲的な投稿を歓迎します。会員以外の原稿掲載については編集委員会が判断します。

二、投稿に際しては、住所・電話番号を明記の上お送りください。原稿は返却いたしませんので、お手元に控えをお残しください。

三、パソコン使用の場合は、プリントアウト原稿にデータファイルを添付の上お送りください。

四、原稿は、新字のあるものはなるべく新字を用い、注の形式等は既刊のものに準拠してください。

五、投稿者は各自の原稿一頁（機関誌の書式）につき一〇〇〇円を発行経費として負担することをご了承ください。

六、次号（23号）の締切は、「論文」枠（査読有）が二〇二四年九月三〇日、その他の枠での投稿が二〇二四年十一月三〇日です。

『原爆文学研究』編集委員

後山剛毅 加島正浩（編集長） 榎本由貴

楠田剛士 中尾麻伊香 中野和典 長野秀樹

野坂昭雄 堀本嘉子 松永京子 山本昭宏

編集後記

今号には四本の自由投稿論文、四本の小特集論文、第七〇回原爆文学研究会で行なったワークショップ「記録からひらく表現」の文字起こしをはじめとし、エッセイ一本と書評二本、詩一作を掲載しています。奇稿くたさったみなさま

のおかげで、今号も充実したものになったかと存じます。寄稿者のみなさまに感謝いたします。また今号も、事務局局長の中野和典さんをはじめとし、編集委員のみなさまに大変お世話になったことを付記させていただきます。感謝申しあげます。

現代カナダの劇作家ニコラス・ピヨンに『屠殺人 ブッチャー』という戯曲があります。日本では名取事務所が、再演のたびに演出家を変え、二〇一七年、二〇一九年、二〇二三年と上演を重ねてきました。今後も再演が行なわれると予想される本戯曲に関する子細な説明は避けませんが、戯曲では大量虐殺を行なった戦争犯罪人の生き残りをひとりひとり殺しているエレーナという女性が登場し、弁護士ハミルトンの片足を、ある復讐のために傷つけます。そして「いつか私に、復讐しに來ればいい」というエレーナに「そして、その先は？私は、そんなことはない」とハミルトンは言い放ちます。暴力が世界中を席卷するそのなかに依然として私たちはいます。（非暴力圏）にいるように思えても、いつ私たちの住むこの場所に暴力がふりかかってくるかは、わかりません。しかし弁護士ハミルトンが自身の足が傷つけられるまでは、身体を脅かされることのない（安全な）日常を送り、そこで「復讐はしない」という考えを育んでいったのだとすれば、（戦時下）で（安全な）場所にいる人間のいま行うべきことは、見えてくるようにも思えます。戦場の外側で非戦の思想を鍛えることが、いま必須の課題として我々に迫ってきているように思うのです。（加島正浩）

原爆文学研究

22

二〇二四年二月二十九日発行

編集 原爆文学研究会

△四〇六〇

福岡市城南区七隈八一一九—一

福岡大学人文学部

中野和典研究室気付

発行 侑花書院

△〇〇〇三

福岡市中央区白金二一九—二

TEL 〇三三三〇〇六七

FAX 〇三三三〇四四二

◇書店にない場合は「地方小出版流通センター扱い」とご指定の上、書店にご注文下さい。

◇継続購読は、花書院「原爆文学研究係」にお申し込み下さい。送料は無料となります。